慶應義塾大学教養研究センター

教養研究センター
設置科目

[単位認定／少人数ゼミ形式]

2021年度ガイダンス
（オンデマンド配信・要keio.jp認証）

https://keio.box.com/v/lib-artsguidance2021

〈配信期間〉
2021年4月1日(木)～6日(火)

いま、最先端の学問は
「教養」かもしれない。

☑ 身体知・音楽ⅠⅡ
Learning Through Affective Experience and Active Participation: Historical Performance Practice of Music

☑ 日吉学
Hiyoshi-ology

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1
Tel 045-566-1151 Fax 045-566-1102
Mail toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

慶應義塾大学教養研究センター

「教養」のすゝめ

大学は専門教育と教養教育の両輪で成り立ちます。

なぜなら、複雑な現実社会の中で専門的知識はそのまま役立つものではないからです。

専門的知識は応用しないと、現実には、はまりません。

応用するために必要なもの。

それが教養です。

さらに専門教育は限られた一分野に徹するから専門。

世の中を生きていくためには専門だけでは偏ります。

そこでも教養は不可欠なのです。

福澤諭吉先生も言っています。

「決して字を読むことのみを勧むるに非ず」

『学問のすゝめ』の中の言葉です。書斎で狭い学問をしているだけでは駄目だということです。

社会的・実践的に、からだを動かして学ぶことまで含めた、広い学問の必要性を述べた言葉です。

福澤先生による「教養のすゝめ」と解してよいでしょう。

教養研究センターは慶應義塾における教養教育の力強い担い手です。

様々な授業を設置して、学部のしきりにとらわれない、教養教育の実践に取り組んでいます。

ぜひ、ガイダンスに参加いただき、履修の参考にしていただければと思います。

所長メッセージ

「星の友情」

新型コロナウイルス感染症流行は、その最も有効な対応策が「分断」であるが故に、大学教育に大きな影響を与えています。学生はキャンパスから引き離され、教師との直接交流を断たれ、学生同士の顔を突き合わせての知的対話は不可能になっている状況が続いています。

しかし、それでも、各人が独自に光を発して、お互いを照らし合うことは可能なはずです。いまこそ、ニーチェの言う「星の友情」を求めようではありませんか。大空にあって、互いに独立して光を発しながら、静寂のうちに奏でられる〈沈黙の音楽〉を、お互いに感じ合う、そして、全体として一つの星座になる関係です。

教養研究センターは、COVID-19 に負けません。この機会を一つのチャンスと捉え、あらん限りの知恵を絞り、学生、教員が分断を乗り越えて、より豊かに交流する学習環境を提供いたします。それが「星の友情」として、将来のみなさんの大きな糧になることと信じています。ぜひ、ガイダンスをのぞき、授業やイベントに積極的にご参加ください。

教養研究センター所長 **小菅 隼人**

Guidance

2021年度教養研究センター設置科目ガイダンス

（オンデマンド配信・要keio.jp認証）

https://keio.box.com/v/lib-artsguidance2021

配信期間 2021年4月1日(木)～6日(火)

教養研究センターの設置科目、履修申告の手続き方法や幅広い活動について紹介します。
履修希望者は必ずご覧ください。（要keio.jp認証）

※keio.jp以外のGoogleアカウントにログインしているとアクセスできません。一度全てのアカウントからログアウトし、ブラウザを落としてから再度keio.jpにログインし直してください。

Learning Through Affective Experience and Active Participation:
Historical Performance Practice of Music

身体知・音楽III

**歴史的音楽（器楽・声楽）を、
当時の演奏習慣に基づき演奏していきます。**

音楽は、身体を介在し表現され、歴史の中で常に、人間の知的な活動と連携してきました。この授業では、音楽を身体で表現することを通じて、歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から見つめ直すことを目的としています。

器楽：経済学部教授 **石井明**／声楽：商学部専任講師 **木内麻理子**

Hiyoshi-ology

日吉学

**ここでしか学べません。
過去から未来を読み解く体験型教育プログラム**

「日吉学」の特徴は、他では考えられない顔ぶれと手法と素材が合体すること。多様な受講生と共に探検・体感し、テーブルを囲み、新鮮な発想をぶつけ合い、多彩な教授陣と共に考えます。教材には塾生なら必見の歴史的宝物が続々登場!

経済学部教授 **不破有理**

身体知・音楽ⅠⅡ

—古楽器を通じた歴史的音楽実践—
—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—

写真提供：（公財）横浜市芸術文化振興財団

音楽を通じて歴史・文化の中の人間の生を追体験し、芸術に秘められた人間の生を、文学・歴史・思想等、多角的視点から理論的に見つめ直します。音楽演奏の実践体験によって、身体を通じた歴史・文化・言語の総合的な学習を行います。
器楽・声楽それぞれ歴史的音楽作品の演奏実践を行い、耳と感性知識、身体を結びつけ、それによって身体を媒体として継承される歴史・文化・言語の連関を実際の体験によって学びます。学期末に公開演奏会を行い、学内・地域に開かれたかたちで成果を披露します。

授業の特長

器楽アンサンブルと、声楽アンサンブルの2つの部門に分かれて行われます。

器楽アンサンブル部門
バロック・ヴァイオリンやチェンバロなど、一般的に古楽器と呼ばれているバロック時代の楽器を用いて、17世紀および18世紀の西洋音楽を実践的に学んでいくというのがこの授業の最大の特徴です。

声楽アンサンブル部門
合唱音楽の原点とも言える、ルネッサンスおよびバロック期の合唱音楽を主に取り上げます。これを実践的に探究していくだけでなく、学問的な観点からも合唱音楽の本質を考察していきます。音楽の発展の中で、人の声が担った役割は大きく、音楽の歴史に与えた影響は計り知れないところがあるということを確認していきます。

授業紹介

器楽アンサンブル部門

バロック・ヴァイオリンやチェンバロの他に、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、バロック・オーボエ、リコーダー、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなどの、バロック時代に使われていた楽器を用いて、当時書かれた、トリオソナタなどの室内楽編成のための作品と、より大きめなアンサンブルであるバロック・オーケストラ（20人程度）のために書かれた音楽作品を取り上げ、バロック時代の音楽作品について深く理解していきます。実践を通じ、17・18世紀の作曲家たちが何を演奏者に、そして聴衆に求めていたのかということや、17・18世紀の器楽作品には、どのような音楽的メッセージが込められているのかということなどを、現代ではなく、当時使われていた楽器を用いることで探求していきます。なお、使用ピッチはa=415となります。一年を通じて、2回ほどの成果発表演奏会を、協生館藤原洋記念ホールで行う予定です。

声楽アンサンブル部門

音を記号化し記録するという行為、つまり楽譜の発展は、多声音楽と共に歩んできたと言っても過言ではありません。そのくらい、合唱音楽が音楽の歴史の中で重要な役割を担っていました。ルネッサンスの時代が終わるまでには、4声、5声、6声またはそれ以上の声部のために、複雑な作曲技法が用いられて数多くの声楽作品が書かれました。そのような時代では、芸術性を高めるということが神への距離を縮めるとも考えられていました。結果、現代までに残されているルネッサンス期の合唱曲の大半は、宗教音楽の分野に属する作品です。しかしながら、バロックの時代の幕開け頃（1600年前後）には、世俗的な音楽にも宗教作品で培われた、もしくは新たに生まれた作曲技法が用いられるようになっていき、声のための音楽の奥行が広がっていきます。このような状況を合唱音楽を実践的に取り組むことを通じて、学んでいきます。

この授業は、日吉音楽学研究室と連携して行っています。
詳しくはホームページ
http://www.musicology.hc.keio.ac.jp/を
ご覧ください。

学生の声

ホールで発表する体験も貴重でした。古楽器から学んだ音そのものの美しさ。

文学部3年

受講を決めたのは、音楽を実際に演奏することで作品の特徴を知りその魅力を体感することができると考えたからです。古楽アンサンブルの授業を選択していますが、何よりも第一の魅力は古楽器を用いて演奏できるということ。そして室内楽、あるいはオーケストラの曲を演奏する中で先生から曲の理解、表現方法について適切に指導して頂けることが魅力です。そして何より、実際に自分たちも、毎年2回、ホールで発表するという貴重な機会の中で、様々な学年の受講生とともに演奏をする貴重な場で、良き音楽仲間に出会えるのも大切な経験になりました。この講義を通じて、古楽器の演奏を通じて音の純度、音そのものの美しさについて気づくことができましたし、発表の場が多くコンサートにも多少場馴れすることができるようになり、集団で演奏する上で必要なコミュニケーションを意識しながら楽しめるようになったのが成長を実感するポイントです。

日吉学
戦争編

日吉キャンパスには広大かつ豊かな自然や歴史環境があります。縄文、弥生、古墳時代の遺跡や1200種を超える生物や植物が生息する森、アジア太平洋戦争末期の帝国海軍の秘密基地や建築史上重要な建造物。
福澤先生は『学問のすゝめ』で、「事物の観察」が学問の第一歩と語っています。「日吉学」では観察とフィールドワークを介して体感し、単なる知識の蓄積にとどまらず、生きた知へ発展させることをめざしています。
これからの社会には、文系理系にとらわれず多面的視点から生み出される創造的な発想が求められるでしょう。つい見過ごしがちな身近なことと現在の我々を取り巻く問題とのつながりに触れることで、広い視野と深い洞察力の重要性に気づき、グループで課題に取り組むことで、問題の発見・解決における個人の主体性と他者との対話・協働の大切さを学びます。

コーエーの襟川陽一社長から盾を授与された受賞者

授業の特長

慶應義塾唯一の授業 慶應のお宝に触れ学びます。

多彩な講師陣と幅広い受講者が魅力

対象は慶應義塾に在籍する中高生（オブザーバー）から大学院生まで。年齢の異なる参加者が混在するグループワークで、多様な発想からの刺激、異なる意見の調整方法を学ぶことができます。

多様な「熱い」学びのかたち

講義とフィールドワーク・体験と討論。最終プレゼンテーションには予行演習で教員の指導、本番では学生と教員による熱い合評会。各自レポートの書き方も学べます。

**日吉学修了証がもらえる
公開発表会も予定されています。**

授業紹介

こんな授業があったのか
キャンパスを通して戦争を見つめ考える。

皆さんは、アジア太平洋戦争末期、日吉キャンパス一帯に海軍の複数の部局が移転してきたことを知っていますか。実は、このころの特攻頼みの絶望的な作戦は、我々のいるキャンパスを中心に展開されていたのです。
今年度の日吉学は「戦争編」と題し、特攻作戦を指揮した連合艦隊司令部の巨大地下壕に入坑し、戦争の痕跡を肌で感じることから始めます。そのうえで、戦争や死に直面した塾生たちの手記や、地下壕が建設された地層の特徴、戦前～戦後のさまざまな地図、この間の植生の変遷とその背景などを調べながら、受講者自らが、キャンパスを通して現在の問題でもある戦争を見つめ直し、深く考える機会にしたいと思います。
前半の7回で課題発見のための講義と地下壕入坑を含むフィールドワークを行い、後半の5回で、グループワークによる課題の整理、資料・情報の収集・整理、及び課題解決に向けての討論を進めます。最後にグループとしての成果のプレゼンテーションを行い、一人ひとりが各自の課題についてのレポートをまとめます。

2021年度 講師紹介

■安藤広道（文学部教授）
縄文から戦争遺跡まで幅広く専門とする
慶應のインディアナ・ジョーンズ? 考古学者。

■都倉武之（福澤研究センター准教授）
慶應義塾のことなら何でもお尋ねあれ、
即座に！ 詳しく！ 解説可能な歴史学者。

■福山欣司（経済学部教授）
「慶應の森」を歩き、愛する森の守りびと。本当はカエルが専門の生物学者。

■不破有理（経済学部教授）
本プログラムの旗振り役。なぜかアーサー王伝説が専門の英文学者。

■大出敦（法学部教授）
アカデミック・スキルズ教育のプロ。本当はポール・クローデルが専門の仏文学者。

■阿久澤武史（高等学校教諭）
日吉台地下壕保存の会の会長にして
日吉の建築探偵・塾高の校舎をこよなく愛する国語の先生。

■杵島正洋（高等学校教諭）
ハレー彗星に魅惑され天文学者になるはずが、地学学者に。
地形や地層や岩石のわずかな痕跡から、過去の出来事を読み取る名探偵。

■太田弘（教養研究センター講師）
名探偵コナン推理ファイル『地図の謎』の監修者で地図教育も専門。
マップコミュニケーターの異名をもつ地図学者。

所属・職位は2021年3月現在

【授業の形式】春学期・火曜5限　知識と体験を自由な発想で味付けをして、熱く冷静に考察する、ユニークな授業

知識・体験		→	課題を見出す		→	まとめる	
講義	フィールドワークや実験		グループワーク	ディスカッション		グループ発表	レポート作成

（新型コロナウイルス感染症の状況により、内容の一部を変更することがあります。）

学生の声

「問い」を発見する授業!

日吉学に大きく2点の特徴が存在する。一つの物事について様々な分野から分析する事と自分で「問い」を設定して分析する事だ。自分が疑問に感じた事、気づいた事を多方面から分析し、まとめ上げるという過程はとても新鮮で充実していた。

慶應義塾高校3年

大学の学びが分かる!

日吉学の魅力は大きく分けて二つあります。一つ目は他の授業ではなかなか体験できないフィールドワークがある点です。実際に資料を読んでもわからないような沢山のことに気づき、学ぶ=読むだけではないのだと理解しました。二つ目は、多様な側面から研究対象を見る意識を身につけられる点です。それぞれの側面から見た事実が重なり、立体映像のように研究対象を捉えられるようになりました。取り上げる時代や日吉に興味のある人はもちろん、全ての学生におすすめしたい講座です。

文学部1年

いろいろな塾生が集う刺激を体感

学部学年問わず幅広い学生が集まって学びを深めるという場は大変刺激的でしたし、これまでの大学生活でなかなかそういった授業を受けてこなかったため貴重な経験になりました。

法学部4年

「驚き」を学問にするにはどうしたらよいのか

「普段過ごしている日吉キャンパスの下に海軍の地下壕があった」と聞けば、多くの人は「驚き」を感じるだろう。日吉学では、その「驚き」を起点に主体的に考えていくことが求められる。その意味で日吉学とは、生の興味や関心を学問の俎上に載せていく、「驚き」を「学び」に変えていく授業といえよう。

法学部3年

新しいタイプの学びの場

「日吉学」は、古地図や古文書をはじめとした、生きた情報に触れながらグループで問題解決を図る、従来の学校教育を覆す革新的な講座です。受講に際しては何事にも好奇心を持ち、知らないことをそのままにせず、問う姿勢を持ち続けることが大切です。社会の本質を捉える一つのきっかけになる授業です。「新しいことをやってみたい」という皆さんの、積極的な受講を期待しています。

医学部1年

オンライン開催（2020年度）

各分野のエキスパートの先生方と多様な背景を持つ学生、双方が白熱させる議論に飛び込みます。新たな知識や考えに出会い、融合させる贅沢な時間でした。学問や学生生活への眼差しを変えます。「ただの丘」としか思っていなかった日吉は、今の私には「学びの神殿」です。

法学部2年

これまでの教養研究センター設置科目紹介

下記の科目は2021年度は休講となりますが、これまでの教養研究センターの設置科目としてご紹介いたします。授業内容の詳細は、ウェブサイトでもご覧いただけます。

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

アカデミック・スキルズⅠⅡ

Academic Skills

論文を書ける。プレゼンテーションができる。大学生に求められる能力です。しかし、どうやればいいのか、手取り足取り教えてくれる授業は案外とありません。論文を書け! 発表をしろ! いろいろな授業でいきなり言われる。そのとき、要領を心得ていない学生さんはとても困るものです。自主的な努力にかなり委ねられ、大学での勉学から脱落するひとつの原因にもなります。そこでこの授業なのです。論文の書き方や発表の仕方を少人数制でじっくり伝授します。2021年度は開講しませんが、そういう授業があることを覚えておいてください。

法学部教授 **片山杜秀**

生命の教養学

The Liberal Arts of Life

この授業は「生命とは何か」「生きるとはどういうことなのか」という問いをめぐる知的探究への誘いです。「生命」という主題には、生物学をはじめとする自然科学だけでなく、哲学・文学・歴史学・経済学・政治学といった人文社会科学の分野からも、多様なアプローチが試みられています。「生命」のような多面的な対象を扱うためには、特定の学問領域を越えて広く思考の素材を追い求め、専門的知見と多様な見識を架橋しながら新たな知を創り出そうとする姿勢が欠かせません。「生命の教養学」とは、そのような「教養」の作法を体感する場として構想された授業です。

商学部准教授 **西尾宇広**

身体知

Learning Through Affective Experience and Active Participation

教室という箱を出て、「聞く・読む」の世界から、文字通り「動いてみる」ことによって文学作品を読み解く講座です。普段は目で追っている文学作品を互いに声に出してみる・体で表現してみる・絵に描いてみる・自分の体験とつなげて他者に語ってみる、という一連のワークショップを通して読み直してみると、全く新たな解釈が見えてきます。それを再び言語化することで、新たな表現力へとつなげていくことが目標です。夏季集中型の少人数の講座で、通信教育課程の学生と通学生が共に学べる環境も今までにない学びの形式を提供します。

法学部教授 **横山千晶**

身体知・映像ⅠⅡ

Learning Through Affective Experience and Active Participation: from Language to Films

文字言語と映像言語を繋げるユニークな授業です。第一線で活躍する映像作家と劇作家をお招きして、映像作品だけに終始することなく、文学・舞台・映像を繋げるダイナミックな授業を展開します。同時に授業で学ぶもう一つ重要なことは、「協働」です。舞台作品もそうですが、映像作品は一人では実現できません。画面に映らない多くの人々の力の結晶が視覚化されるのです。徹底的な議論を通して、自分の言いたいことを他者につなげる・他者の意見に耳を傾ける地道な作業は、今後、皆さんの大きな力となっていくのです。

法学部教授 **横山千晶**

Information

庄内セミナー

『庄内に学ぶ「生命(いのち)」』

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shonai/

慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス(TTCK)がある山形県鶴岡市を拠点にして開催している、生命をテーマにした教養セミナーです。対話と議論を中心に据えつつ、専門家や地元の方々のお話と体験・体感型プログラムを組み合わせた4日間、自然豊かな庄内の地で学部生・大学院生・塾員が一緒になって精一杯「生命」について考え、語り、体感します。即身仏拝観、修験体験、先端生命科学研究所ラボ見学など、過去・現在・未来が体の中を突き抜ける「学び」の場に立ち会ってください。(実施方法につきましては慎重に検討し、周知いたします。)

情報の教養学

http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/

情報に関わる技術は年々進化しています。しかし、それが世間一般に広く浸透するためには、何らかのきっかけが必要になることが多いです。
例えば、2020年は、新型コロナウイルス感染症がきっかけで、オンライン会議システムが広く使われるようになりました。「情報」は技術だけではなく、様々な事柄が相互作用し、その成否につながります。また、本来良いと思われることであっても、利用者の使い方次第では悪い結果になりかねません。このようなことを理解するために、2021年度の「情報の教養学」は、情報に関わる様々な話題を一流の講師に講演いただきます。

■2020年度講演動画

オンライン社会を生き抜く著作権

(福井健策氏)
30分×3本の講演動画配信

- その1 とりあえず著作権の初歩を30分でマスターする
- その2 動画配信・オンラインイベントを使いこなす
- その3 パクリと二次創作の境界を探ってみる

http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/talks/fukui-kensaku-20201020/

■2019年度 講演一覧

福井健策氏

佐藤優氏

神武直彦氏

坂井豊貴氏

角田直行氏

ゲームの教養学

人が生きていくためには物語やフィクションが必要ですが、そのメディアとして一世代前に「本」や「映画」が果たしていた役割を、現在では「ゲーム」(ここではヴィデオゲームを指します)が担っているといっても過言ではありません。たとえば昨今、多くの人にとってヨーロッパ中世の「アーサー王物語」への入口は〈Fate〉シリーズではないでしょうか。大学におけるゲーム研究も盛んになってきました。その端緒として本講座ではゲーム業界の第一人者や研究者にご講演いただき、ヴィデオゲームにまつわる諸問題について考えていきます。

読書会「晴読雨読」

学生も教員も対等に語り合う読書会を開催しています。

- **ハンナ・アレント『人間の条件』を読む**
  2018年4月~2019年12月 全14回
  〈講師〉西尾宇広(商学部准教授)
- **丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む**
  2018年12月~2020年1月 全9回
  〈講師〉片山杜秀(法学部教授・教養研究センター副所長)

学習相談

アカデミック・スキルズの修了生の有志が、相談員として学習に関するさまざまな相談を受け付けています。お気軽にどうぞ!
期間:学期中の平日(Webサイト参照)
場所:図書館1Fスタディサポート または オンライン
https://libguides.lib.keio.ac.jp/hys_studyadvice

寄附講座

教養研究センターに提供される寄附金を基に運営されている講座です。この支援によって実験的な授業を展開し、質の高い授業が正規化され、毎年着実に成果を重ねています。

※詳細はポスター、web等でご確認ください。http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

Publications

教養研究センターで行われている研究・教育・交流活動は、各種刊行物やウェブサイトにて発信しています。

教養研究センター選書

教養研究センター所員の研究活動を広く知っていただくため、「教養研究センター選書」を毎年慶應義塾大学出版会より刊行しています。

『産む身体を描く ―ドイツ・イギリスの近代産科医と解剖図』
石原あえか 2012年

『汎瞑想 ―もう一つの生活、もう一つの文明へ』
熊倉敬聡 2012年

『感情資本主義に生まれて ―感情と身体の新たな地平を模索する』
岡原正幸 2013年

『ベースボールを読む』 吉田恭子 2014年

『ダンテ『神曲』における数的構成』 藤谷道夫 2016年

ペルーの和食
―やわらかな多文化主義
柳田利夫 2017年

ロシア歌物語ひろい読み
―英雄叙事詩、歴史歌謡、道化歌
熊野谷葉子 2017年

ジョン・ラスキンの労働者教育
―「見る力」の美学
横山千晶 2018年

『修身論』の「天」
―阿部泰蔵の翻訳に隠された真相
ミヤン・マルティン, アルベルト 2019年

理性という狂気
―G・バタイユから現代世界の倫理へ
石川学 2020年

〈選書刊行記念企画〉「著者と読む教養研究センター選書」

「著者と読む教養研究センター選書」は「教養研究センター選書」をより広く知ってもらうことを目的とした企画です。第1回はLive配信も行いました。

第1回 理性という狂気 ― G・バタイユから現代世界の倫理へ（石川学）（2020年11月2日開催）

第1回の様子

書籍

「生命の教養学」の授業をまとめた「生命の教養学」シリーズの他、教養研究センター監修の書籍も随時刊行しています。

『感染る
生命の教養学14』
赤江雄一・高橋宣也 編 2019年

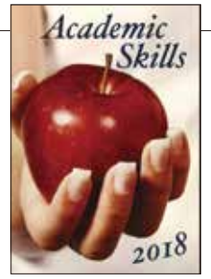
『組織としての生命
生命の教養学15』
荒金直人 編 2019年

『生命の経済
生命の教養学16』
西尾宇広 編 2020年

学生論文集

「アカデミック・スキルズ」で執筆された学生論文は、2005年以降毎年、学生自身で編集し一冊の本にまとめられ、『アカデミック・スキルズ学生論文集』として刊行しています。

2017年度



2018年度

2019年度

アカデミック・スキルズ
― 10分講義ビデオ ―

教養研究センター設置科目の少人数授業「アカデミック・スキルズ」は「アカスキ」の愛称で親しまれるセンターの看板授業です。（※2021年度は休講です）
自分で問題を発見し・調べ・発信する力を1年にわたって実践的に習得します。このアカスキのエッセンスを誰でも手軽に学べるよう、教員による講義をそれぞれ10分の動画に収録し、公開しています。ぜひ、レポートや卒業論文執筆の参考にしてください。

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/culture/academic.php#movies

片山杜秀（法学部教授）

坂本光（文学部教授）

髙山緑（理工学部教授）

原大地（商学部教授）

テーマ例

研究とは何か? 小菅隼人（理工学部教授）	**効率的に情報を探すには** 竹田咲子（日吉メディアセンター）	**言葉は身体表現** **―英語という言語を捉えなおす―** 横山千晶（法学部教授）
文献を読む 片山杜秀（法学部教授）	**読書術** 坂本光（文学部教授）	**ドイツ語を知り、日本語を知る** **―大学生の語学―** 杉山有紀子（理工学部専任講師）
翻訳について 高橋宣也（文学部教授）	**君も哲学してみないか** **―哲学的思考法―** 斎藤慶典（文学部教授）	**教養の語学** **―フランス語―** 原大地（商学部教授）
レポートの問いの立て方 鈴木亮子（経済学部教授）	**調査的面接法の基礎** **―質的手法への誘い―** 髙山緑（理工学部教授）	**中国語** **―発音の攻略―** 高橋幸吉（商学部准教授）
剽窃（ひょうせつ）について 池田真弓（理工学部准教授）	**Persuasive English Presentations: Three Is the Magic Number** アダム・コミサロフ（文学部教授）	**図書館資料と著作権** 今井星香（日吉メディアセンター）

所属・職位は2021年3月現在